

「祭りのあと・学術講演会記」

「先生、あれは芋の花です。」

沿道は、7月の日差しを浴びた紫の花々で、畑一面彩られていた。

私は、空港までの道中、ハンドルを握りながら、昨夜から風のように過ぎた20時間と、そして今回の講演会の準備に費やした1年間の想い起していた。長かったようで束の間、祭りのあとの感情にも似ていた。。

平成23年3月。

小林会長から、次期執行部での学術担当の話をうける。

理事を受けるには一抹の不安もあった。しかし会長の

「みんなでフォローするから大丈夫！」

というひと際明るい口調に 思わず前向きになってしまったような。。

諸先輩たちが培った歴史に学び、十歯会事業に携わり、そして次の世代の先生へ橋渡しする。皆が会の運営に携わるのが基本であり、自分もそんな年齢になって、これも良い経験かと思いお引受けした。やるからには、会員へそして地域住民への有益性を自分なりに追求してみようと考えた。

その学術部のメイン事業に「学術講演会の開催」がある。

まず講師として頭をよぎったのが、「筒井照子先生は？」。

個人的には先生の提唱する「咬合療法」を学び、診療室で実践してきた。

歯科医療の中で重要な視点での療法であり、講演会の実現は、地域医療の進展の一助に十分成りえる機会との想いはあった。しかし非常に多忙な先生であり、規定の条件で 北九州からここ十勝にお呼びすることは正直未知数だった。

5 月 初めての部会で、例えば。。。という口調で部員の先生に講師案を話しては見るが、大風呂敷の域を出ず。疑問符は、払しょくされぬまま、自分なりのアプローチを始める。

まず、先生の過去の講演会の履歴で、郡歯会があるかをリサーチするが、今一つつかめず。担当副会長をはじめとする十歯会員の先生へアドバイス願ひ。講演会を担当した先輩先生の経験談は、とても参考になった。

今回の戦略では準決勝、決勝となる決めてのポイントを 2 つ掲げた。

私は、筒井先生主宰の「咬合療法研究会」の会員ではあったが、先生と特別近い関係でもない、一会員。しかし、幸運なことに所属する北日本支部長の矢守先生は、数年前まで筒井歯科医院で勤務されていた。こ

の一点に望みをかける。

まず知りたかったのは、先生に郡歯会の講師として打診できる余地があるのか否か？そして、一般的な謝礼とは？

夏前に、こちらの主旨と想いを先の支部長に伝えと、

「今度先生にお会いするので、聞いてみますね。」

との言葉に、まず糸口を見る。その後の返事では、謝礼の件は不明だったが、依頼の余地は、日程次第でありそうだと。「ありそうだと」は、「手紙で想いを伝えられる」と解釈した。

いよいよ決勝である。佐々木副会長には、

「一郡歯会なので限られた条件の中ですが、とはっきり伝えてそれでお伺いしよう」

と助言をいただき、早速手紙を書く。家内に読み聞かせ、少し夫婦の会話も増えたような？(余談)とにかく十勝は、北海道でも有数のフロンティア精神に富む地域であること、そして十歯会員の先生の前向きな熱意を手紙に綴った。

そして事は進展する。私のメールに先生からの返事が舞い込んだ。

「十歯会での学術講演会の件、喜んでお引き受けします。」

先生より翌年の可能な日程候補をいただいた。そうして平成24年7月1

日に学術講演会が決定した。

平成 23 年度は、お口のシートベルト事業の中で、マウスガードとともに咬合療法に関連した内容を地元誌「chai」にて 地域発信していた。

編集長は、小学校からの旧友であったので、事業主旨と地域医療の一助、住民の方への有益性を伝え、相互に意見交換して、良い方向に進むよう協力を頼んだ。この事も私には大きな支えとなった。物事は、いろいろな人々の関わりで より良い形となることを 改めて学んだ。

11 月 道歯会館での先生の講演会に出席。直に講師了承のお礼と、進行中の連動事業の説明をし、そして十歯会の想いをお伝えした。

年度が替わってからは、副部長の米澤先生と二人三脚で(だいぶ米さんのほうが、足が長いのですが。。。)準備に奔走し、遂に 6 月 30 日 20 時過ぎに、とちぎ帯広空港に 筒井先生は降り立ったのだった。

21 時から遅めの懇親会をセットしていたが、プレ講演会は、道中すでにスタートする。車中で先生は、自らの大学恩師との卒後研修からの想い出を話された。そして、その後臨床で起きる疑問との格闘を 切々と語られた。その後懇親会でも、まれにみるフレンドリーな展開で、翌日の講

演会の予告を見るような夜だった。

翌朝 8 時過ぎ、私は ホテルのロビーにいた。その後先生をお連れし、
十歯会館へ。その間、先生に私の家族を問われお話しすると

「じゃ、増地先生がんばらないとね。」

と声を掛けられる。そしてご自身 ご主人昌秀先生とともに多忙な仕事
に追われ、子供達との家族旅行など全然してあげられなかったと 一瞬
母の表情になられたのが 非常に印象的であった。

9 時、学術講演会は幕を開けた。多数の会員の先生、スタッフの参加
のもと予定の時間をかなりオーバーした熱意溢れるものだった。

「何時まで話していいんですか？私は、帰りの便に間に合えば 何時まで
でもいいですけど！」

余裕でにやりとする先生の表情に、歯科界に一石を投じ、患者さんに情
熱を傾け続ける先生のちからを見た。そして講演会は 13 時過ぎ幕を閉じ
た。

この後、今回の講演を受けて私達が、どう反映していけるかが重要で
あろう。「祭りのあと」に、各医院の「祭り」を展開して頂く一助になれば、

今回の講演会の意義はあったのではないか。

そんなことを思い浮かべながら、やがて私たちは空港に到着した。

別れ際先生は、またにやりとしてこう言った。

「十勝楽しかったですよ！みなさんにどうぞよろしく。

これからもがんばってください。」

そして筒井照子先生は、風のように九州の地へ帰って行ったのだった。

最後に、今回の講演会開催にあたって 多くの先生のお力をお借りしたことに ころより深く感謝申し上げます。また、準備から当日の運営にご協力いただいた米澤副部長をはじめとする学術部の先生、そして折角の経験だからと今回紙面を割いていただいた広報部の先生に深くお礼を申し上げます。